

文化と文化的自己観

一言 英文・松見 淳子

はじめに

本論では、心と密接な関係を持つ文化と、その捉え方である文化的自己観について先行研究のレビューを行い、最終的に日本文化で重要な概念であると考えられる自己向上について著者たちの研究を紹介する。

1. 文化と発達

心理学の父ゼントは晩年、感覚や反応などの基本的な心理機能の他に、社会に生きることによって培われる意図的記憶、推論、言語などのより高次の心理機能を明らかにすることの必要性を説いた (Cole, 1996)。彼はこの「高次精神機能」を、普遍的で時間的に一定の機能であるとは考えず、歴史や文化に媒介された心理機能であると考えた。従って、高次精神機能の研究には発生的、歴史的、発達的方法が必要であるとした。

発達を通して、社会環境は巨大な強化システムとして我々の行動、認知、感情を形成する (Biglan, 1995)。文化の学習は幼児期から行われるが、この段階から発達の意味は文化によって異なってくる。日本人の母親は子に対して大人への従順や礼儀、情緒的統制を身に付けることを期待しているのに対して、アメリカの母親は言語的な自己主張能力を身に付けることを期待している (Azuma, 1994)。つまり文化によって望まれる「よい子」の定義は異なっている。もし、各文化において「よい子」と見なされている行動が強化されている

くのであれば、「よい子」であるために必要な認知や情動も強化されていく。例えば日本文化では、他者のために自分の気持ちを抑え、我慢することは何らかの賞賛を得るであろう。自分の気持ちを統制し、相手の立場に立って考えるということは「大人」になるために重要なスキルである。実際、発達する子の能力と親の発達期待との間にはそれぞれの文化で高い正の相関関係があった。

発達を通して、行動だけでなく物事の意味やその間の結びつきなどの意味体系も学習される。人は特定の文化で育つうちに、どう振舞うのが良いのかという行動の準則、図式を習得し、自分の行動の準則として使うことができるようになる。これを内面化（または内在化；**internalization**）という。生活のために必要な意味体系を内面化し、自らの社会に適応していくことを「文化化（**enculturation**）」という（箕浦，1996）。

文化化には公的教育が担う部分が非常に大きい。例えば、日本の教師はクラス全体に対し話しかけることで集団の一員としての主体を養い、アメリカの教師は一人一人に話しかけることで一個人としての主体を養う（**Matsumoto, 2000**）。また、日本の教育では「なぜ間違っただのか」に注目するのに対し、アメリカの教育では「ほめる」教育を行う（**Stigler & Perry, 1988**）。教科書で教えられる価値や思想は、政治的時代背景に対応して変遷する（箕浦，1996）。

教育や家庭生活を通じて文化の意味体系がある程度内面化されると、個人の中には外界の認知に関する地図、主観的な概念の集合が出来上がる。一般的に価値観、信念や態度と呼ばれる概念の集合を、「主観的文化（**subjective culture**）」と呼ぶ。これは食料、衣服や道具といった歴史的産物を指して使用される「客観的文化（**objective culture**）」と対比される。心理学が主に対象としているのは主観的文化である。そして個人の価値観、意味体系やそれに従う行動パターンの説明と予測を、文化的な視点から検討し、実証的データに基づいて明らかにするのが比較文化心理学や文化心理学である。

2. 文化への心理学的アプローチ

比較文化心理学は、心は本質的に普遍的な機能（**etic**）であり、文化によってその表出規則が異なる（**emic**）という視点に立つ。異文化を比較するためには文化間に比較の基準を設定する必要がある。従って、比較文化心理学では主観的文化を操作的に定義し、定義された構成概念を使って体系的に主観的文化を数量化する。比較した上で、文化に共通の機能を見つけるのが比較文化心理学の目的である（**Hofstede, 2001**）。

従来の心理学や比較文化心理学では人の心理機能が本質的に外界と独立しており、外界に向かって働きかける一個の独立したシステムであると考えられる。これを「心性単一性の仮定（**Jahoda, 1986**）」という。それに対し文化心理学は、心性単一性の仮定に疑問を投げかけ、文化の多様性を明らかにすることを目的とする。文化心理学では、心理機能は文化によって形成され、文化も所属する人の主観的文化によって維持、変容されていくとする、心と文化の相互構成的視点を取っている（**Cole, 1996**）。従って、心理機能は文化によって根本的に異なっており、文化を比較するための共通次元を設定することは不可能であると考えられる。

つまり比較文化心理学と文化心理学は、普遍性を求めるか、独自性を求めるかという視点こそ異なるが、人間理解に文化的視点をを用い、それを実証心理学的方法論によって追求していこうとする点においては共通である。主観的文化と文化の強化システムは図と地の関係にあり、文化を実証的に記述することは、そこに暮らす人間の心理機能の説明や予測に大きな貢献をすることになると考えられる。

一方、社会学的見地から **Hofstede (1980, 2001)** は世界 50 ケ国の国際企業の従業員約 7 万名を対象に、価値観に関する世界的な調査を実施し、因子分析から個人主義-集団主義、権力格差、不確実性の回避、男性らしさ-女性らしさ、後に長期志向-短期志向の次元（**Hofstede, 2001**）を抽出した。個人主

義-集団主義の次元は、集団に対して個人に置かれる重要性を表す。アメリカなど欧米文化圏の国家は個人主義得点が最も高く、反対に韓国、台湾など東洋国家や南米国家は集団主義得点が高かった。権力格差の次元は社会的権力の違いが受け入れられている度合いを表す。不確実性の回避の次元は、文化の成員が不確実な状況や未来に対して脅威を感じる程度を示す。男性らしさ-女性らしさの次元は、その国でジェンダーによる違いが存在する度合いを表し、当時の日本は最も高い男性らしさの得点を示した。長期志向-短期志向の次元は、忍耐、序列、儉約、面子や恥など儒教的価値観の項目が負荷したもので、利益の未来志向性を表す。これは東洋文化をより考慮した後年の調査で抽出された。**Hofstede** の因子分析は、個人の評定値を国の回答人数で割って国ごとの平均値を産出し、これらの値の相関行列に対して行われた。このように社会学の見地からの文化の実証的記述は、国家や政治的思想、歴史的慣習や社会制度的要因を分析の単位として行われることが多い (**Inglehart & Klingemann, 2000**)。個人の行動を説明する心理学では、あくまで個人がこれらの価値観をどれだけ内面化しているかが数量化の焦点となる。

3. 文化的自己観

3-1. 自己観

心理学の見地から実証的に文化を記述するには、個人の行動を説明、予測できる次元で文化を操作的に定義することが求められる (**Matsumoto, 2000**)。**Triandis (1989)** は自己観を実証的に測定するために、私的自己、公的自己、集合的自己の3つの自己観を定義した。「自己観」とは、個人が自己を認識する際に用いる概念枠のことであり、ある文化において歴史的に作り出され、暗黙の内に共有されている主体の性質についての通念である。すなわち、自己観とは、「私(人)はこういうものだ」という認識に、一定の文化集団の成員が共有している当たり前の意味体系、スキーマのことである。自己観は、自分の認識のみならず、他者や、より一般的な人間理解の際にも解釈の枠組みとして

使用されるため、その文化の成員の持つ「人とはどういうものか」といった社会的現実を構成する。

自己観を測定する方法には、**Twenty Statements Task**（以下 **TST**；**Kuhn & McPartland, 1954**）という自己記述課題がある。これは「私は…」に続いて自分を表す一文を **20** 文列挙する課題である。例えば「私は料理が得意です」や「私は背が高い」のように他者関係を介さない自己を認識した反応は私的自己を、「私は皆に親切だ」のような一般化された他者に対する自己を認識した反応は公的自己を、「私は心理学科の **A** です」のような社会集団の中での自己を認識した反応は社会的自己をそれぞれ測定するのである。回答者の所属する文化において、どの自己観をより多く認識していたかを **20** 文中の出現頻度で測定し、また、プライミング（一言・松見，**2003**）などの、ある特定の状況下でどの自己観に最も接近しやすかったかを **20** 文中の出現箇所の速さで測定する（**Triandis, 1989**）。例えば個人主義の文化では私的自己が、集団主義の文化では社会的自己と公的自己が、それぞれ多く観察される。自己観は、個人が直接的に接近可能な文化の媒介概念なのである。

3-2. 東西の自己観

Kitayama & Markus (1991) は、自己観の含む意味や行動に及ぼす機能に系統的な文化差があるとし、自己観はそこに暮らす人々の行動、認知、感情を強く規定する影響力を持つものであると唱えた。彼らの理論付けた「文化的自己観」には、巨視的に洋の東西を対照に **2** つの種類が存在する。北米中級白人男性文化で優勢とされる「相互独立的自己観」とは、自己は周囲の人間と本質的に切り離された主体であるという認識を持ち、行動は主体から外界へ働きかけるもので、人間は基本的に自己の実現に向かうように動機づけられていると考える自己観のことである。相互独立的自己観は、主に自己に内在する様々な特性によって定義される（**Figure 1** 参照）。一方、日本文化で優勢とされる「相互協調的自己観」とは、自己は周囲の重要な他者と繋がっているという認識を持ち、行動は周囲の人間や状況に依存し、人間は集団の成員として調和を

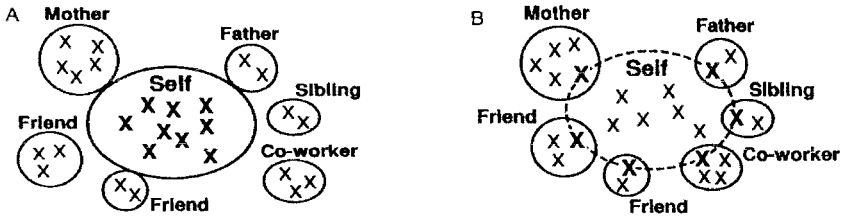


Figure 1 相互独立的自己観 (A) と相互協調的自己観 (B) の自己観 (太い X が自己観の定義される場所を表す). (Kitayama & Markus, 1991 より引用)

保つように動機づけられていると考える自己観のことである。相互協調的自己観は、主に周囲の重要な他者との関係に対して定義される (Figure 1 参照)。北山らはこれまでに、東西文化の比較を通じて人の価値観のみならず認知機能までも文化的自己観に媒介されていることを明らかにしている (Kitayama, 2000)。欧米文化はデカルトの合理主義的思想やルソーの自己表現の賛美といった啓蒙思想を土台として、個人に合理性、主張性や自己実現といった相互独立的自己観を育んだと考えられる。一方、日本文化は神道、仏教、道教などの調和思想、他者志向、儒教などの役割志向的思想を土台に、個人に規範や関係性を重視する相互協調的自己観を形成したと考えられている (Kitayama & Mityamoto, 2000)。文化的自己観を想定することで行動パターンの文化差を体系的に説明することができる。

3-3. 文化的自己観に媒介された社会的現実

文化的自己観の違いは、身近なところでコミュニケーションの質に表われる。英語の “I” は周囲の状況や話し相手に依って変化せず、省略されない。一方、日本ではその場に依って自己の呼称は異なり、主語を抜いた文でも通じる。これは行動の主体が重要である相互独立的自己観と、個人の主体に重点のない相互協調的自己観の文化における語用法の違いと考えられる (Kashima & Kashima, 1999)。発達のにも、アメリカでは初期の教育から言葉の実質の意味が重視され、論理的言い回しが奨励されているのに対して、日本では言語の裏に込められた意味が重視され、本音の読み取りが求められる (Matsu-

moto, 2000)。さらに認知機能において、同じ言語情報でもアメリカ人は言葉の言語的意味を正確に認知する能力に長けているが、日本人は言葉に込められた感情価をより正確に認知する能力に長けている (Ishii, Reyes & Kitayama, 2003)。これらの文化差は、主体性を重視し、文脈に独立したコミュニケーションを重視する相互独立的自己観と、関係性を重視し、文脈に依存した非言語コミュニケーションを重視する相互協調的自己観の文化差であると考えられる。

文化的自己観の違いは他者理解も媒介する。他者の行動や感情を理解するとき、人は自分が思う他者を理解しているのであり、他者理解は「人はこうあるものだ」という概念枠、つまり自己観に媒介された理解となる。同一の事件に対するアメリカと中国の新聞記事を比較した研究では、同じ犯行の原因を、アメリカの新聞では容疑者の個人的特性や動機に帰属させる傾向があったのに対し、中国の新聞では犯行に及んだ状況要因に帰属させる傾向があった (Morris & Peng, 1994)。これは、人の行動を認識する際の実概念枠が、相互独立的自己観が優勢であるアメリカでは個人の内的属性に、相互協調的自己観が優勢な中国では外的要因に「向けられていた」ことを示している。従来は他者の行動の原因を推測する際に、人が状況要因より内的属性に重点を置いて帰属することは、帰属の根本的エラー (fundamental attribution error) と呼ばれ、普遍的な現象であると考えられていた。従来の心理機能に関する理論が、実は欧米文化の相互独立的自己観を土台とした素朴理論を前提としている可能性があることは留意すべきことである。

3-4. 動機づけの文化差

心理機能を媒介する文化的自己観は、社会的現実だけでなく人の動機づけも左右する。動機づけに関する研究では、一般的に人は自己による選択や決定の知覚に関して内発的動機づけが促進すると考えられていた (Deci & Ryan, 2000)。しかし、アングロ系とアジア系の子供を比較した Iyengar & Lepper (1999) では、アングロ系の子供が従来の理論どおり自分で選んだ課題に対し

てより長く取り組み、良い成績を残したのに対し、アジア系の子供は母親が望む課題に対してより長く取り組み、良い成績を残した。つまり、相互独立的なアングロ系文化では自己の選択により強く動機づけられ、相互協調的なアジア系文化では重要な他者による選択により強く動機づけられていたのである。人の内発的動機づけは、発達の早い段階から文化的自己観に媒介される。

Heine, Kitayama, Lehman, Takata & Ide (2001) において、相互独立的自己観が優勢な文化では自己の望ましい内的属性を確認したときに、相互協調的自己観が優勢な文化においては自己の不足を認識したときに、それぞれ課題に対する動機づけが高まることが明らかにされた。この研究では、課題の成績のフィードバックを操作し、自発的に課題に取り組む時間を測定することで動機づけの強さを測定した。その際、カナダ人の被験者は良い成績であったと知らされた課題（図中の成功条件）により動機づけられたが、日本人の被験者は悪い成績であったと知らされた課題（失敗条件）により動機づけられた（Figure 2 参照）。この文化差は、自己確認を重視する相互独立的自己観の優勢な文化において、人は自己を肯定する機会を求めるよう動機づけられているのに対し、相互協調的自己観の優勢な文化においては「～らしさ」への適応を重視

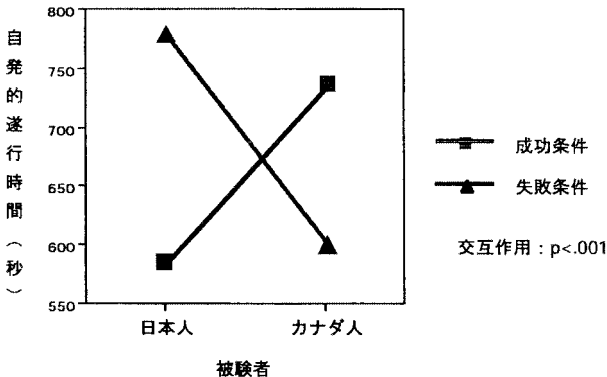


Figure 2 成功と失敗の成功経験が同様の課題の自発的遂行時間に及ぼす効果。日本人とカナダ人の比較。(Heine, Kitayama, Lehman, Takata & Ide, 1999 より引用)

するため (Azuma, 1994), 人は自己の欠点の克服に動機づけが奨励されてきたために生じた文化差であると考えられている。例えば, 日本文化では発達過程を通して「もう小学生なんだから」, 「高校生らしい責任ある行動を」と規範と現実の自己との差を認識させられる機会が非常に多い。これは, 相互依存的自己観の優勢な文化では関係性が重視され, 関係性の存続には自己を規範に適応させることが奨励されているからである (Heine, Lehman, Markus & Kitayama, 1999)。日本文化では, 家族や友人などの集団の一員として, 学校のように明言されないものも含めて目指すべき基準が日々の生活の中に偏在し, それに対して自己の至らない点を特定し, 無くす行動が強化される。例えば日本における「反省」とそれに対する「努力」は, 相互協調的自己観に根ざした慣習である (Lewis, 1995)。

3-5. 幸福の文化差

動機づけが文化的自己観によって媒介されているのであれば, その文化での自己実現や, その達成の結果得られるであろう幸福が内包する意味も左右されると考えられる。主観的ウェル・ビーイングの定義は文化によって規定されている (Diener & Suh, 2000)。例えば相互独立的自己観の優勢な北米文化では, 自己選択による内的属性の肯定的確認や自己実現, それに伴う個人の自尊心の高揚 (Rosenberg, 1965) を達成することが主観的幸福感に重要な要素となり, これを追求することが奨励されている。アメリカの小学校教師の仕事は生徒の自尊心を養うことであり, そのためには, ときに生徒の自尊心を損ねるような難問はあえて避けるようなこともある。一方, 日本のように相互協調的自己観の優勢な文化における教育とは, 集団の基準に適応するよう個人を修正する過程であり, 反省や頑張ることを奨励する (Lewis, 1995)。主観的幸福感に与える自尊心の効果は, ある程度文化に普遍的であることが明らかにされてきた (Diener & Diener, 1995)。しかし, 先行研究で東洋文化における主観的幸福感に与える自尊心の効果は他の文化に比べて相対的に少なく, 文化的な違いが注目されてきた。香港とアメリカの主観的幸福感に影響する要因を比

較した Kwan, Bond & Singelis (1997) において、アメリカでは相互独立的自己観から自尊心を介して主観的幸福感を説明する影響が多かったのに対し、香港では相互協調的自己観から対人的調和の重要性を介して主観的幸福感に与える影響が自尊心以上に多かった。Uchida & Kitayama (2000) では、日本人は自尊心以上に他者からの情緒的援助が主観的幸福感に与える直接効果が有意に大きかった。一方、アメリカ人は自尊心から主観的幸福感へ与える影響が大きく、他者からの援助が主観的幸福感に与える効果は、自尊心を介した間接効果のみ有意であった。Kitayama, Markus & Kurokawa (2000) は、自己報告による種々の感情と幸福の経験量の相関関係を検討した (Figure 3 参照)。この研究で用いた感情語には、対人関係で生じる肯定的な感情 (図中の関与的快感情)、対人関係で生じる否定的な感情 (関与的不快感情)、自己の独立を確認することにより感じる肯定的な感情 (脱関与的快感情) と自己の独立を疎外されたときに感じる否定的な感情 (脱関与的不快感情) の 4 種類があった。これらの感情語と一般的な幸福感に類する単語 (一般的快感情) の日常生活における経験量を尋ね、それらの間の相関関係を多次元布置して検討した結果、一般的幸福に最も近く布置された感情語はアメリカでは脱関与的快感情、日本では関与的快感情であった。これらの研究は、幸福感に内包される意

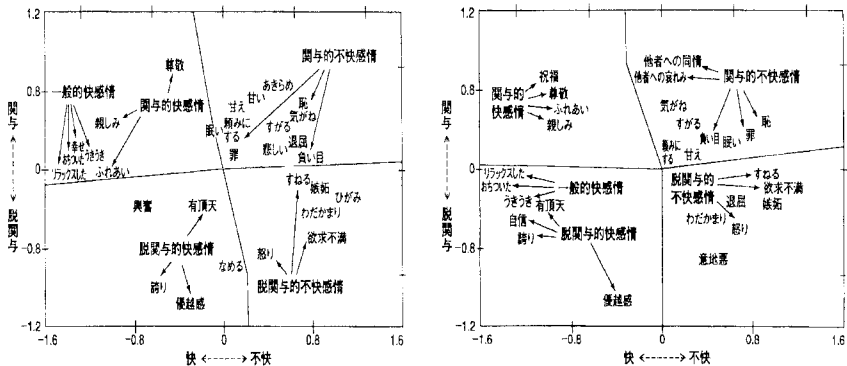


Figure 3 4種類の感情語と一般的幸福に関する単語の相関関係、日本(左)とアメリカ(右)の比較。(Kitayama, Markus & Kurokawa, 2000より引用)

味が文化的自己観によって媒介されているということを示している。

4. 対人関係を重視する文化

4-1. 日本文化的「自己」

これまでの知見は、相互協調的自己観の優勢な日本文化では、「関係性」を主軸とするシステムが人々の主観的文化の根底を成していることを示している。これは、日本文化が関係性に寄与するような認知、行動や情動を強化し、相互協調的自己観を育む機能を持っているということである。従って日本人のウェル・ビーイングは、関係性に寄与する認知、行動や情動を実現する先にあると考えられる。

古くから、日本文化で良好な関係性を保つためには「思いやり (sympathy)」が重要であることが示唆されてきた (Kitayama & Markus, 1999)。「思いやり」とは、他者の気持ちを察し、その人の立場に立って考え、その上でその気持ちや状態に共感もしくは同情することと定義される (内田・北山, 2001)。内田らは「思いやり」の個人差を測定するための思いやり尺度を作成し、思いやりのある日本人が他者からの援助を受ける確率が高いことを示した (Uchida & Kitayama, 2000)。先述のように、他者からの援助は日本人の主観的幸福感を予測する主な要因である。

4-2. 自己向上尺度の作成

Kitayama & Markus (1999) では、思いやりの他にもう一つ、関係性を保つ重要な機能として「自己向上 (self-improvement)」を挙げている。「自己向上」とは、個人に内面化された、内集団に共有される暗黙の規範に対し、自分に欠けている点、自分が持つ望ましくない特性、あるいは自らの至らない点などを同定 (反省) し、それを努力を通じて無くしていこうとする心理的・行動的傾向、と定義される (北山, 1998)。先述のように、日本人が自己の短所の克服を重視していることも「自己向上」による動機付けの結果である。

Table 1 自己向上尺度項目の因子分析結果。(主因子法 バリマックス回転) Chronbach's $\alpha = .80$

質問項目	自己批判	努力適応する	模範に対する反省	(逆転)非適応	共通性	得点相関	項目総
1. 自分の努力不足を感じ、「このままではいけない」という気持ちを持って行動を改善する。	0.73				0.59	0.60**	
2. 失敗した自分を情けなく感じ、次の成功のために力を注ぐ。	0.66				0.46	0.53**	
3. その集団にいるために自分のどこが足りないのかを考え、落ち度のないように行動する。	0.65				0.50	0.64**	
4. 自分の責任を果たせなかったことを反省し、補うような行動をする。	0.54				0.32	0.48**	
5. 満足いかない結果に対し、原因を探して同じ結果にならないように備える。	0.53				0.34	0.37**	
6. 自分が周囲より劣っている部分を無くそうとがんばる。	0.52				0.44	0.64**	
7. 自分が周囲と異なる部分を無くそうとがんばる。		0.76			0.59	0.46**	
8. 周囲から「ういている」と感じたら、自分の行動を改めようとする。		0.64			0.53	0.64**	
9. 周囲のペースについていけない自分を、「人付き合いが悪い」と自ら批判し、周囲に合わせて行動する。		0.60			0.37	0.40**	
10. 集団に取り残されないようにしていく努力をする。		0.54			0.40	0.55**	
11. 自分の考えが周囲と食い違ったら、自分の考えを修正しようとする。		0.52			0.30	0.40**	
12. 自分よりできる人の行動を見習って、自身の向上に役立っている。			0.78		0.69	0.40**	
13. 自分と模範的な人物の差異を認識し、少しでも近づくための努力をする。			0.70		0.62	0.52**	
14. 他の人の良い行いに対して自分を省みて、その人のまねをしてみる。			0.53		0.35	0.48**	
15. なぜ周囲が自分を批判するのか分からないと感じることがある。(R)				0.59	0.36	0.35**	
16. その集団には、自分には理解できない考え方の人が多いと感じる。(R)				0.57	0.34	0.34**	
17. 他の人から批判されても、めったに反省しない。(R)				0.43	0.31	0.50**	
回転後の負荷量平方和	2.61	2.24	1.53	1.06			
分散説明率	15.34	13.15	9.00	6.25	累積	43.75	

(R) は逆転項目 ** $p < .01$

日本文化の相互協調的自己観システムで文化的に適應するためには、他者志向的側面である「思いやり」と、規範に貢献する自己批判的側面である「自己向上」が重要な要素であると考えられる。現在のところ「自己向上」については概念の個人差を測定する尺度が存在しない。よって筆者らは、大学生を対象に「自己向上尺度」の作成を試みた。

まず、大学生 45 名を対象に内集団で共有される理想像に対して自己の短所を認識した経験、状況やその時の感情、対処行動などを自由記述形式で収集した。これらの自由記述を参考に自己向上的な人物像を表すと考えられる項目のリストを作成した。このリストを 194 名の大学生を対象に、あなたが「この集団の一員でありたい」と願う集団（仲の良い友人たち、学校のクラブやゼミ、家族など）における普段の行動や考え方にどれだけ当てはまるかと尋ね、5 段階評定させた。評定データの因子分析（主因子法、バリマックス回転）から、4 つの因子を抽出した。項目－総得点相関が低い項目と複数の因子に高い負荷を示した項目を削除し、最終的に項目は第 1 因子が「自己批判」、第 2 因子が「適應する努力」、第 3 因子が「模範に対する反省」、第 4 因子が「非適應（逆転項目）」であった（Table 1 参照）。これらの因子は、いずれも自己向上の定義に沿うものであった。追って再検査信頼性と基準関連妥当性の検討を計画している。

お わ り に

相互協調的自己観の優勢な日本文化では関係性に重点が置かれている。集団の規範に寄与するための概念である自己向上は、良好な関係性を養う働きを持っている。故に著者らは、日本文化におけるウェル・ビーイングを達成するためには本質的に「自己向上」が重要な鍵になると考えている。今後は、自己向上の個人差とウェル・ビーイングとの関係に焦点を当てて検討を進める。

References

- Azuma, H. (1994). *Discipline and education in Japan*. Tokyo: Tokyo University Press.
- Biglan, A. (1995). *Changing cultural practices: A contextualist framework for intervention research*. Reno, NV. Context Press.
- Cole, M. (1996). *Cultural Psychology: A once and future discipline*. Harvard University Press. Cambridge. 文化心理学：発達・認知・活動への文化・歴史的アプローチ (2002). 東京：天野清訳新曜社.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M., (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, **55**, 1, 68–78.
- Diener, E., & Diener, M. (1995). Cross-cultural correlations of life satisfaction and self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 653–663.
- Deiner, E., & Suh, E. M. (2000). Measuring subjective well-being to compare the quality of life of cultures. In E. Diener & Suh (Eds.), *Culture and subjective well-being*, pp 3–12, Cambridge, MA: MIT Press.
- Heine, S. J., Lehman, D. R., Markus, H. R., & Kitayama, S. (1999). Is there a universal need for positive self-regard? *Psychological Review*, **106**, 4, 766–794.
- Heine, S. J. Kitayama, S., Lehman, D. R., Takata, T., Ide, E., Matsumoto, H. (2001). Divergent consequences of success and failure in Japan and North America: an investigation of self-improving motivations and malleable selves. *Journal of Personality & Social Psychology*, **81**, 4, 599–615.
- 一言英文・松見淳子 (2003). 文化的自己観構造への実験的アプローチ. 関西学院大学文学部心理学科 2002 年度卒業論文.
- Hofstede, G. (1980). *Culture's consequences: international differences in work-related values*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Hofstede, G. (2001). *Culture's consequences: comparing values, behaviors, institutions, and organizations across nations*. Thousand Oaks, London, New Delhi: Sage.
- Inglehart, R. & Klingemann, H. D. (2000). Genes, Culture, Democracy, and Happiness. In E. Diener & Suh (Eds.), *Culture and subjective well-being*, pp. 165–175. Cambridge, MA: MIT Press.
- Ishii, Reyes & Kitayama, (2003). Spontaneous attention to word content versus emotional tone: Differences among three cultures. *Psychological Science*, **14**, 1, 39–46.

- Iyengar, S. S., & Lepper, H. R. (1999). Rethinking the value of choice: A cultural perspective on intrinsic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 349–366.
- Jahoda, G. (1986). Nature, culture and social psychology. *European Journal of Social Psychology*, **16**, 17–30.
- Kitayama, S., Markus, H. R. (1991). Culture and the Self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224–253.
- Kitayama, S. & Markus, H. R., (1999). Yin and yang of the Japanese self: the cultural psychology of personality coherence. In: D, Cervone, & Y, Shoda (Eds.), *Coherence of personality: Social-cognitive bases of consistency, variability, and organization*. pp. 242–302; New York, NY, US: Guilford Press.
- Kitayama, S., Markus, H. R. & Kurokawa, M. (2000). Culture, emotion, and well-being: good feelings in Japan and the United States. *Cognition and Emotion*, **14**, 1, 93–124.
- Kitayama, S., Markus, H. R. (2000). The pursuit of happiness and the realization of sympathy: cultural patterns of self, social relations, and the well-being. In E. Diener & Suh (Eds.), *Culture and subjective well-being*. pp. 113–161. Cambridge, MA: MIT Press.
- 北山 忍 (1998). 自己と感情: 文化心理学による問いかけ. 東京: 共立出版株式会社.
- Kashima, E. S. & Kashima, Y. (1999). Culture and language: the case of cultural dimensions and personal pronoun use. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **29**, **3**, 461–486.
- Kuhn, M. H., & Mcpartland, T. (1954). An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, **19**, 69–76.
- Kwan, V. S. Y., Bond, M. H., & Singelis, T. M. (1997). Pancultural explanations for life satisfaction: adding relationship harmony to self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 1038–1051.
- Lewis, C. C. (1995). *Educating hearts and minds*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Matsumoto, D. (2000). *Culture and psychology: People around the world*. Wadsworth, a division of Thomson learning, Inc. 文化と心理学: 比較文化心理学入門 (2001). 南 雅彦・佐藤公代訳. 京都: 北大路書房.
- Morris & Peng, (1994). Culture and cause: American and Chinese attributions for social and physical events. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 949–971.

- 箕浦康子 (1996). 文化のなかの子ども. 東京: 東京大学出版会.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Stigler, W. J. & Perry, M. (1988). Mathematics learning in Japanese, Chinese, and American classrooms. *New Directions for Child Development*, **41**, 27-58.
- Triandis, H. C. (1989). The self and social behavior in differing cultural contexts. *Psychological Review*, **96**, 3, 506-520.
- Uchida, Y., & Kitayama, S. (2000). Culture and well-being. Unpublished data, Kyoto University.
- 内田由紀子・北山 忍 (2001). 思いやり尺度の作成と妥当性の検討. 心理学研究, **72**, 4, 275-282.

—— 一言 英文 大学院文学研科博士課程前期課程 ——

—— 松見 淳子 文学部教授 ——